

「蝶」と「蛾」、 “butterfly”と“moth”をめぐって

関田 敬一

1

俳句における「蝶」は春の季語である。「てふの羽の幾度越る塀のやね 芭蕉」「うら住や五尺の空も春のてふ 一茶」「山国の蝶を荒しと思はずや 虚子」「あをあをと空を残して蝶分れ 林火」「天よりもかがやくものは蝶の翅 誓子」日本人は蝶に春の訪れを感じて喜ぶのである。

われわれにとって当然のように春と結びつく「蝶」ではあるが、それを『万葉集』(759)の和歌に見ることはできない。もっとも「蝶」の古名は『新撰字鏡』(892)にある「かはひらこ」であったが、日本で最初の漢詩集である『懷風藻』(751)の中に「蝶」は見られるので、漢字の「蝶」が用いられるようになったのは新しいことではなかった。『古今和歌集』(905)や『源氏物語』(1001)の時代になると、それぞれ「散ぬればのちはあくたになる花を思ひしらすもまとうてふかな (435)」や「胡蝶」などの使用例がでてくるようになるのであるが、それでも「蝶」の季節は春と決定されるほど広まることはなかったようである。¹

『万葉集』の時代には、「蝶」は忌避されるものだったのである。蝶の蛹はほとんど動かないので死んでいるとみなされた。しかしその死である蛹から、まったく異なる形で出て来て空を舞う蝶の姿は、すなわち死者の魂とされたのである。「蝶」は死と結びつけて考えられた。そして復活するとなれば、古人にとってその発想は信仰に近いといくのも不思議ではない。『日本書記』によれば皇極天皇の3年(644)

に、蝶を「常世の神」とみなす信仰が大流行したという。しかし人心を惑わすものであるとされて教祖が処分になった。また中国においては既に紀元前200年ごろには、蝶を人間の亡霊にみたてる信仰がうまれていた。このような理由で「蝶」の例歌が少なくなったのであろうと考えられるのである。²

『基本季語500選』によれば、「蛾」という夏の季語が詠まれ始めたのは、大正時代以降であらうといわれる。この漢字をわれわれの祖先が知らなくて長らく使えなかったのではない。「蛾」は「蝶」とは別の理由で、詩に詠まれなかったのである。「蛾」は日本人にとって、いとうべきものを想わせるのであって、古人の感性によれば、それは詩語の基準にいたらないということになるようである。しかしそれが大正になると詠まれるようになるのは不思議なことであらう。「何物が蛾を装ひ入り来るや 瓜人」「浮き沈みつつ流れゆく大蛾あり 龍太」「灯蛾ひとつ包みし紙のこと忘る 飛旅子」古人にとって「蛾」は好んで使うような言葉ではなかったのである。その変化には自然主義文学の影響もあると考えられる。

しかし「飛んで火に入る夏の虫」と諺にもあるように蝶にはない、夜の灯火に飛び込んで焼け死ぬこともいとわぬ習性をもっている蛾はまた「夏の虫」、「夏虫」と呼ばれてきた。そして此方をもちいた例歌が古典に見られるのである。「夏虫の火に入るがごと」(『万葉集』1807)「夏虫の身をいたづらになすこともひとつ思いによりてなりけり」よみ人しらず(『古今集卷十一恋』)「人の身も恋にはかえつ夏虫のあらはに燃ゆと見えぬばかりぞ」和泉式部(後拾遺和歌集卷十四恋)このように古人は、「夏虫」に自ら火に飛び込んで死ぬ一途な恋をかさねてみていた。「夏虫」とは時に蛍や蟬をも意味するとされる。火に飛び込むのは蛾だけではないのだが、「夏虫」の多くは蛾を表しているのだという。曖昧なことは悪いばかりでないだろう。「夏虫」と言って、あとは想像力に任せるのも古人のおおらかな感じがして好ましく思われる。ほかに「蛾」には、「火虫」、「火取虫」などの呼び名もある。これが古の詩人にとっての蛾であったのである。

また「蛾」の古称は「ひひる(ひいる)」である。この呼称においては事情がまた異なる。『持統紀』には越前国司が「白き蛾」(カイコガであらう)を献上したことが記されている。『万葉集』巻13挽歌の「蛾葉」は「ひひるは」または「ひむしは」と訓(よ)

むそうである。「蛾羽」は蛾の翅で薄いもののたとえに使われた。「ひひる」とは主にカイコガを意味し、この時代の天皇に献上するほど価値のある大切なものであった。

2

『昆虫分類学』を参照すると、実際に日本には蝶が約290種、(『基本季語』には500とある)蛾においては約4880種が記録されているそうである。³ 蛾のその種類の多さに驚くものの、蝶にしても290種もいるとのことである。そのなかでいずれの種を日本人は「蝶」、「蛾」として見てきたのだろうか。

『基本季語』によれば「蝶」の項目にあがるのは「粉蝶・黄蝶・紋白蝶・鳳蝶・黒あげは・烏あげは・尾長あげは・麝香あげは・山上臈・だんだら蝶・岐阜蝶・小灰蝶・拵蝶・蛱蝶・赤蛱蝶・瑠璃蛱蝶・逆八蝶・石屋蝶・一文字蝶・小紫・大紫・孔雀蝶・緋緋蝶・豹紋蝶・天狗蝶・斑蝶・浅黄斑蝶・蛇目蝶・日陰蝶・木葉蝶・胡蝶・蝶々・双蝶・春の蝶・眠る蝶・狂う蝶・舞う蝶」である。夏の季語「蛾」の項目においては「ひひる・ひひる羽・火取蛾・火取虫・火虫・燈蛾・火蛾・燭蛾・夏虫・夏の虫・鹿の子蛾・夜盗蛾・夜蛾・毒蛾・天蛾・尺蛾・蓑蛾・木蠹蛾・枯葉蛾・刺蛾・斑蛾・蝙蝠蛾・螟蛾・葉捲蛾・夕顔別当・背条天蛾・内雀・与那国蚕蛾」が載る。

「蝶」のように特定の種を表すのではない総称と考えられるのは「胡蝶・蝶々・双蝶・春の蝶・眠る蝶・狂う蝶・舞う蝶」である。「蛾」においては「ひひる・ひひる羽・火取虫・火虫・燈蛾・火蛾・燭蛾・夏虫・夏の虫」。「蝶」においては総称が個別種のうしろに並ぶのであるが、「蛾」では総称がまえにくる。関心をもてば個別種を表す名称を好むようになるのが人情と思われるのである。山本健吉氏も「蛾」を好かなかったようだ。およそ4880種の割には「蛾」のほうに別称が少ないのも、その不人気の証明になるだろう。

ところでヘルマン・ヘッセに「少年の日の思い出」という小さな作品があるのを覚えておられるだろうか。少年がどうにも欲しくなってしまうとおもわず友達のコレクションから盗んでしまったのは、クジャクヤママユであった。美しいかどうかは別として、少年が欲しがったのは「蛾」である。ドイツ語における“Schmetterling”

あるいは“Falter”という言葉は、蝶と蛾を含めた鱗翅類という意味で区別をしない
そうである。ヘッセのようにドイツの人々にとっては、クジャクヤママユその他の蛾
に対して、日本人が蛾に対する時のような疎ましい印象を持たないのであろうと思
う。それゆえ少年たちは、蛾の美しさに素直に魅せられてしまうのではないだろうか。

日本においても北杜夫の「百蛾譜」が知られている。蝶よりも蛾に魅力を感じるよ
うになる病気の少年の話である。固定観念を持たない子供は素直に感じとれるので
ある。これは『堤中納言物語』にでてくる「虫愛づる姫君」と同じであろう。宮崎駿『風
の谷のナウシカ』も人の嫌う虫を愛することのできる少女であった。

3

「蝶」・「蛾」の漢字のなかに、われわれが好悪の情をいだくようになった理由がある
のだろうか。諸橋『大漢和辞典』にあたっても「蝶」が美しいという記述はないよう
である。むしろ注目すべきは「蛾」のほうで、「1. かひこのてふ。ひむし。2. 眉。
蛾眉がびの略。3. 三日月。蛾の触角にたとへていふ。4. きくらげ。5. にはか。6. 姓。」
とある。アリ「蟻」・「螳」に同じともある。『大漢和』によれば「蛾眉がび」とは「美しい眉、
美人」のことをいうそうである。中国では「蛾」は美人と結びつく。さらに「蛾翠がすい」
は「美人の眉の黒く美しい形容」であり「蛾黛がたい」は「美人の眉」であり「蛾揚がよう」は「美
人の眉の美しいさま」である。「青蛾せいが」も「蛾眉」と同義である。すると寺山修司の「青
蛾館」は「美人の屋敷」ぐらいの意味となる。

先にドイツ語では日本語の「蝶」と「蛾」のような感情的区別がないと述べた。「蝶」
・「蛾」は「昼」と「夜」をつけて区別する。これはフランス語でも同じで、「蝶」を「昼
のパピヨン」、「蛾」を「夜のパピヨン」とする。「昼」、「夜」で好き嫌いの感情をわけ
るのは難しいことであろう。小型犬にパピヨンと名付けられた種があるが、フラン
スで《papillon》が愛しいものであるという証明になろうかと思う。ちなみに犬の
パピヨンは耳が立っているのだそうだが、耳のねている場合は《phalène》「ファレ
ーヌ」(シャクトリガの意) というのだそうである。

漢語の「蛾」にいまわしい意味がないとすると日本語の「蛾」の定義を知らなくて
はならない。『日本国語大辞典』で、まずは「ちょう」の項目から。「1. チョウ(鱗翅)

目に属するガ類以外の昆虫の総称。体は一般に細長く、胸部にある二対の葉状のは
ねは美しい色彩の種が多く鱗粉でおおわれる。頭部には、糸状で先端がふくれた一
対の触角、および一對の複眼と単眼を具えるほか、ぜんまい状に巻いた口器があり
花の蜜や樹液を吸うのに適する。昼間活動し、ふつう、はねを背上に立ててとまる。』
『大漢和』にはない「美しい色彩」とあるのである。ちなみに『新潮日本語漢字辞典』
の「蝶」には「美しい四枚の羽をひらひらさせて飛ぶ」とあるので「蝶」においても
日本語と漢語での意味が異なるのである。『日本国語大辞典』にもどって、2～4は
略し「5. 美しい女性のたとえ。美女。」とある。やはり日本人にとっては「蝶」が美
女と結びつくのである。

つぎは「が」である。「チョウ(鱗翅) 目の昆虫のうち、チョウ類を除いたものの総
称。形、大きさなどチョウによく似ているが、ふつう体が太く、鱗片が密生し、は
ねは比較的狭く、一部のものを除き、はねを広げたまま止まり、夜に活動するなど
の点で区別される。色は一般に地味で、触角はくし状、羽毛状、葉状などある。」「地
味」というのは「美しい色彩」の対称的表現であろう。また「作物の葉を食害するも
のが多い」、つまり、悪ものなのである。『大漢和』のように「美人」に結びつく定義
は見当たらない。たとえばモンシロチョウなどによる青ものへの被害、アゲハチョ
ウによる柑橘類への問題は見過ごされているようだ。蛾のみが害虫ではないだろう。
この点鼠兎があるようである。

そして「ひいる(ひひる)」。「昆虫の蛾の古称。後には、特に蚕の蛹の羽化した、
蚕蛾をいう場合が多い。」この語は方言として生きていて、「ひいる」の他、蛾の総
称として、「ひいろ・ひゅうろ・ひいら・ひる・ひり・ひりょお・ひろ・ひるこ・へえ
ろ・ひいるめ・へえるめ・ひいろおむし」などが33地域の方言に用いられるとある。
そして語源説として、「よく灯を消すところから、火嵌(ひひる)の義か」が付いて
いる。何故これほど方言に古称が残っているのだろうか。「蛾」と「ひひる」の違いは、
音によることが大きいのではないだろうか。「ガ」という発音が受け入れにくかった
ことで、それが今日まで双方のイメージを分けているのではないだろうか。

英語はドイツ語やフランス語と異なり、“butterfly”と“moth”で区別する。英語における“butterfly”は日本語の「蝶」、 “moth”は「蛾」に対応するだろうか。少しさかのぼって古代ギリシャにおいても、蝶は人間の死霊と考えられて「プシュケ」（靈魂）と称された。研究社『英語歳時記』の“butterfly”の項には「英文学では、チョウへの言及は比較的少ないように思われる。チョウは洗礼をうけずに死んだ子のさまよう靈魂だといい、一般には不吉な連想を伴っている」と説明がある。⁴

“butterfly”のどちらかといえば消極的な役割にくらべれば、“moth”にはずっと人間と深いつながりがあったようである。大修館『イメージ・シンボル事典』には「1. 破壊者（『ホセア』5, 12）2. 墮落（『マタイ』6, 19）3. 寄食者、他人の金で暮らす怠け者（とくに女性）（『コリオレーナス』1, 3 『オセロ』1, 3）」と記されている。

ところで「蛾」を「モス」と言い換えれば、われわれには思い出すものがある。『モスラ』である。『東宝特撮映画全史』によれば、「原案作成には純文学畑から福永武彦、堀田善衛、中村真一郎の三人に依頼」したとある。さらに「『モスラ』のファンタジックで女性的な感触には、三人の起用が関係している」とある。また「モスラは、ゴジラ、ラドン、アンギラス、バランが恐竜を原型にしていたのに対し、その発想は蛾からとられている。MOTHRAという名は、蛾であることを示すと同時に、MOTHERにも通じる」というのである。さらにモスラは「やさしさに満ちたロマン」なのである。この原案を担当したフランス文学者たちにとっては、やさしいMOTH(RA)は正義の味方であったのだ。⁵

さらに世界を中国や東南アジア、南米などに広げてみると、「蛾」には切実な意味が隠されているかもしれないのである。『世界昆虫食大全』によれば、薬用として「カイコガについては、繭から糸を繰った後に残る蛹を細い串に刺して炙り、小児に食べさせれば疳の虫を収める、白癰蚕（白癰病菌 *Beauveria bassiana* という糸状菌に感染して死んだカイコガ幼虫）は驚風を鎮める、孵化した後の蚕卵紙（カイコガに卵を産みつけさせた紙）、成虫、蚕沙（カイコガ幼虫の食べ残したクワの葉や糞などの混合物）も用いられる」との記述がある。（P.21）そして食用として「養蚕が行われているアジアの諸地域では、カイコガを食べるところが珍しくない。日本でも昔

からカイコガの蛹をおかずとして食べて来たところは少なくない。特に山間部で肉や魚の入手が容易でなかった地域ではタンパク質源の一つとして利用されてきた。」（P. 42）と書かれているのである。チョウ目におけるその他の食用として、コウモリガ類、スズメガ類、イチモンジセセリ、ニカイメイガ、サンカメイガ、ブドウスカシバ、イラガの名が挙がる。⁶ このような習慣も「蛾」や「ひひる」、そして“moth”のイメージに対して影響をもつのではないか。この点では、蛾に比べれば蝶の影響はわずかである。こういった経験は大正時代以降の自然主義文学の流行に関係しているのではないだろうか。「蛾^が」という言葉は忌まわしいものの例として注目されるようになった。そういえば冬虫夏草は日本においても有名だが、忌まわしい蛾に由来することと関係があるのだろう。忌まわしいゆえに、効力も期待された。

Oxford English Dictionary の定義では、“butterfly”として「1. 鱗翅目の昼に活動する昆虫。2. a. けげげしい服を着たかるい人。b. 薄っぺらいものを表す。c. 華奢なものを不必要な力でもって壊す意味で “to break a butterfly on a wheel” を用いる。d. 期間労働者、季節労働者。e. 冒険をする前の気持ちをあらわす “butterflies in the stomach, tummy”、その他」をあげている。“moth”には「1. さまざまな破壊的、寄生的無脊椎動物。2. a. 衣服に被害を与える小さな夜行性の昆虫。イガ。b. イガも含め蝶とともに鱗翅目をなすすべてのもの。3. 他者の世話になって生活する人。4. a. 無駄遣いをするもの。b. 破滅へと導く人。c. スラングとして “prostitute” とある。複合語としては、“butterfly” に “butterfly-brained”, “butterfly-kiss” など30例が、“moth” には “moth-face”, “moth-soft” など32例が載る。

「蛾」について記述のある作品をあげてみよう。石川啄木の『一握の砂』に「マチ^チ擦れば二尺ばかりの明るさの中をよぎれる白き蛾のあり」という短歌がある。豊島与志雄に「白蛾」といって妖しい魅力の女性を描く短編がある。室生犀星に「蛾」、大庭みな子に「蛾」、尾崎士郎に「蛾」、安岡章太郎に「蛾」と蛾をタイトルにした作品がある。広津和郎に「誘蛾灯」。太宰治の短編「おさん」に「蛾の形のあざ」が見られる。

金子光晴は詩集『蛾』のなかで「蛾よ。/なにごとのいのちぞ。うまれでるよりはやく疲れはて、/かしらには粉黛、時のおもたさを背にのせてあへぎ、/しばらくいつては憩ふ、かひないつばさうち。」と詠んだ。粒来哲蔵は詩集『蛾を吐く』で、自分がどうしようもなく繰り返す吐血物を「蛾」であるとしている。「白蛾」は除き、ただ「蛾」とした時は好意的な意味では使われないようだ。

泉鏡花は『婦系図』のなかで「蛾」とルビを振る。芥川龍之介は「蛾」ではなく「澄江堂雑記」や「夢」のなかで「火取虫」をつかう。芥川は大正時代の代表的な作家だから、「蛾」も使っているだろうと調べてみたところ、福田恒存の指摘があった。芥川の「或自警団員の言葉」のなかに、「蛾」となるべきと思われるところが繰り返しすべて「蟻」という漢字になっている。何故これが全集においても訂正されずに残り続けているのだろう。不思議なことである。⁷

萩原朔太郎は「青猫の序」で蛾の魅力を、「蝶を夢む」では蝶というよりも蛾の夢を、『月に吠える』では「蛾蝶」の語順を用いている。朔太郎は養蚕の盛んであった群馬県出身だから、白蛾のイメージがあったのではないか。また朔太郎の気質からして「蛾」に魅かれるところがあったのであろう。日本の作家としては珍しい例ではないだろうかと思う。

「蛾」は助詞の「が」と同音である。音としてどうであろうか。どうしても好まれる音のように思われないのである。漢字としては虫編に「我」、すなわちselfishなのだろうかとも考えてしまう。因みに英語のほうは“butterfly”の中に“butter”と“fly”が入っているのである。しかし“moth”の発音のやわらかさと深みは“butterfly”の発音にはないのではなかろうか。

6

英米では、たとえばEdgar Allan Poeの“Sphinx”やH.G.Wellsの“The Moth”に不気味さはあれども蛾を軽んじて嫌う態度はみあたらない。他の作品においても蛾を日本人のように忌まわしいと決めつける表現はほとんどないだろう。あのWuthering Heightsの最後において、“moths”が舞っているという表現があるけれども、これはOEDでいうところのすべてを破滅に導いたものをあらわしているのだ

る。これはあきらかに日本人の「蛾」の使い方とは違っている。Virginia Woolfが“The Death of the Moth”のなかで“Again, the thought of all that life might have been had he been born in any other shape caused one to view his simple activities with a kind of pity.”⁸と言いつつ、目の小さな“moth”が死にゆくことに底知れぬ関心を見せるのだが、このような向き合い方は蛾を軽んじる日本人には難しいのではないだろうか。

英米の詩作品に“butterfly”と“moth”がどのくらい出てくるのかコンコルダンスによって数字をあげてみよう。ここでは複数形と所有格も含めることにする。まずはイギリスから。Chaucerの“butterfly”が3回、“moth”が3回、これを“butterfly”を先として3:3と記す。Spenserが3:1。Shakespeareが6:7。Donneが0:0。Herrickが1:2。Swiftが1:1。Blakeが5:6。Burnsが2:1。Wordsworthが14:3。Coleridgeが1:1。Byronが5:5。Keatsが8:7（“Death-moth,” “Tiger-moth”を含む）。Shelleyが1:9。Tennysonが2:3。Browningが21:10。Arnoldが1:0。Yeatsが6:20。アメリカではEmersonが2:3。Poeが1:0。Whitmanが2:1。Dickinsonが48:2。Frostが5:4。Craneが2:6である。

ShelleyやYeatsにおいて比率に差が見られる。“moth”を20回も用いたYeatsのアイランドでは現在、*The Moth*という名の文学と芸術の季刊誌が発刊中である。またインターネットで検索すると“moth”が入るタイトルの英語の新しい文芸作品が少なからず発行されていることがわかる。

またアメリカではNational Public Radioでも放送した、“The Moth”という文芸にかかわる人のグループがニューヨークなどで開く語りの会に人気がある。これもまた日本語の「蛾」ではありえないことのように思う。

Blakeやロマン派のByronやKeatsにおいて、“butterfly”と“moth”の比率があまり変わらない点にも注目したい。そういえばWhitmanが手にのせていた有名な鱗翅目は“butterfly”ではなく“moth”であった。

しかしDickinsonは圧倒的に“butterfly”なのである。この詩人は“moth”のもつ「破滅」や「墮落」には魅かれなかったのである。社交を絶ち父親の家からほとんど出ることのなかったこの詩人は“butterfly”や“bee”がお気に入りであった。した

がって彼女は太陽を求めた。

20世紀になると、少なくとも前半は暗い時代であった。その時代、Frostに冬の“moth”を歌ったものがある。

To a Moth Seen in Winter

Here's first a gloveless hand warm from my pocket,
A perch and resting place 'twixt wood and wood,
Bright-black-eyed silvery creature, brushed with brown,
The wings not folded in repose, but spread.

この後、Frostは寒さの中、孤独な“moth”が心配になるのである。そして最後のほうで“but cannot touch your fate./ I cannot touch your life.”と語りかけるのである。そこでは寒さに耐え抜く“moth”に尊厳さえ感じられるのである。⁹

山本健吉は『基本季語』の「蝶」と「蛾」の両方の解説欄でドナルド・キーンがアメリカ人は蛾を美しいと思うが、蝶は美しいとは思わないと言ったので、びっくりしたと書いていた。氏は日本人として、あたりまえに「蝶」を称えたのではないだろうか。そこでキーンは反対に蛾を擁護した。理由がわからなかった山本は、アメリカ人の好みが南国の派手やかな色彩によるものかと訝っている。しかし図鑑などで北米の蛾と日本の蛾を比較してみたが、キーンの断言を色彩の点から証するのは難しいと思った。

日本と西洋の橋渡しをしながらも、西洋の文化の中で、つまり日本と比べてみれば蝶・蛾の区別をほとんどしない、さらに“moth”の魅力を十分に知っている環境で育ったキーンにとって、山本の「蝶」への思い入れが、キーンの“moth”(「蛾」ではなかったかもしれない)への義憤に駆られる態度を導き出したのではないだろうか。「わたくしは」とすべきところを「アメリカ人は」としてしまったのではなかろうか。これは誰にもあることであるし、震災後の東北に共感し日本人になったドナルド・キーンにありえて不思議のないことである。「蛾」に肩入れしたキーンのなかに

は、Frostが尊厳の意味を問いかけた詩“To a Moth Seen in Winter”と同じ「蛾」がいたはずである。

注

1. 山本健吉 (1989)『基本季語500選』p.54 講談社
2. 小西正泰 (1993)『虫の博物誌』p.174 朝日新聞社
3. 平嶋義宏・森本桂・多田内修 (1989)『昆虫分類学』p.398 川島書店
4. 成田成寿 (1978)『英語歳時記』p.118 研究社
5. 田中友幸 (1983)『東宝特撮映画全史』pp.197-207 東宝株式会社出版事業室
6. 三橋淳 (2008)『世界昆虫食大全』八坂書房
7. 福田恒存評論集 第12巻 (2008) 麗澤大学出版会
8. Woolf, Virginia Stephen, *The Death of the Moth and Other Essays*, (A Harvest book, 1970), p.5.
9. Frost, Robert, *Collected Poems, Prose, & Plays*, (The Library of America, 1995), pp.323-4.